



バルタランドの娘

バルタランドの娘に恋をいたしました。バルタランドとは町の広場に一夜にして出現した塔のことです。

それはグルグルと渦を巻きながら空中高くそびえていて、まるでバベルの塔のようでありました。その渦は手すりのない階段となっており、人々はそれを上っていくのです。

けれどもそれは遊園地なのです。その階段の途中には塔の内部に向かって祠のような入口があり、バルタランドには色々な店がありました。例えば綿飴、風船、宝くじ、展望カフェや、中央の内部にはサーカスまでやっておりました。

私は風船を買いに行ったのです。それはヘリウムガスと対にして売っていて、1ダースづつ、木の箱に詰められておりました。

本当はヒコーキが欲しかったのです。自分が空を飛べるヒコーキが。しかし風船売りの言うにはそれは無理な注文だそうで、やむなく私は風船を買うことにしたのです。

ところがいざお金を払う段になると、風船売りはえらく高いことを言い出しました。まさかただの風船にそれはないだろうというくらいの額でした。

実際そんなお金は持っていなかったのです。私は値段を下げてもらうか、それがだめなら断ろうとしたのですが、風船売りはいったん買うと言った以上この値で買ってもらわなくてははいけないと無理をいいます。

その時助けてくれたのがその娘であったのです。そんなに無理を言うもんじゃあないわ、娘がそう言うと、何故か風船売りはしぶしぶながらも引き下がってしまったものでした。娘はその様子を見てコロコロと笑いました。

私はその娘に恋をしてしまったのです。一目惚れでした。娘は小柄で色が黒く、髪は一本のおさげにまとめておりました。着ている服も質素な物でしたので、私は娘に誰なのかと尋ねました。

娘はまたコロコロと笑って、私はバルタランドの小間使い、怪しい者よ、と言いましたが、その声は私には小さな鈴を鳴らしたように愛らしく聞こえたものでした。

私は娘をカフェに誘いました、すると娘はいたずらっぽい目玉をクルクル回して、それは貴方を助けたお礼？と聞きました。

いや、そうではなくて、これは恋なのです。私は幾分頬を赤らめながらも思い切ってそう言いました。

娘はふうん、と首を傾げて、でもあたしは貴方の思っているものではないかもよ、と言いました。

私はそれでも構わないと言いました。そうして娘と一緒に展望カフェに行ったのです。カフェの窓はスタンドグラスになっており、外の光が色とりどりに踊っておりました。

カフェのカウンターには女主人がいて、彼女に何やら目配せしました。どうやら娘の母親らしく思われました。

そうして娘は私にその父親も紹介してくれました。父親はやさぐれていて、カフェの隅っこのボックス席でヴァテマラを飲んでおりました。私は彼の前にひざまづいたのですが、彼は私の膝にわざと熱いコーヒーをこぼすのです。

しかし私は耐えました。このくらいのことで許されるものならば。私の胸は娘への思いで一杯だったのです。

彼は、はっはっはと笑い、いいだろう、と言ってくれました。私は天にも昇る幸福感に満たされました。

すると彼はなおも笑いながら、その声は哄笑となり、それからとぐろを解くと長々と空に伸び上がり始めました。天は割れ、地は裂け、烈風が襲いました。ステンドグラスは砕け、そのかけらがキラキラと弾けていきました。

実のところ彼は巨大なアカエイであり、バルタランドの渦巻き型の塔は彼の尻尾であったのです。

そうして私は小さな小さな青いエメラルドの粒となり、水晶の小瓶に詰め込まれました。

彼女は時々気まぐれにその小瓶をもてあそび、瓶の中に真鍮の粉を振りかけてくれるのですが、私はそれで結構幸福なのです。